

# ギュンター・グラス遺作『限りあることについて』 に関する一考察

勅使川原 聖子

はじめに

ギュンター・グラス (Günter Grass) の〈遺作〉となった『限りあることについて』 („Vonne Endlichkeit“)<sup>1)</sup>とは、〈詩画集〉と呼ばれるジャンルに分類されるが、いかなる作品であるのか。

上記の問いには、大きく分けて次の二つの問いが含まれる。

1) 〈遺作〉として、著者の死後およそ4ヶ月後に出版されたこの作品がどのような経緯によって刊行されたのか。

2) この作品のなかでグラスは何を描こうとし、何が主題であるのか。

本拙稿における考察は、まず、上記の1)の経緯に触れ、その後、とりわけ書籍全体の表題ともなった巻末を締めくくる同題の詩『限りあることについて』(VE:S.173)に焦点を絞る。この詩の訳出と解釈とを中心として、限定されてはいるが、作品の重要なエッセンスを抽出し、微細でも2)の問いへの回答を導き出したい。

ドイツ語圏においても、この作品については現在のところ書評の存在を知るのみであり、日本においては、雑誌『すばる』2016年10月号に飯吉光夫氏によって、この書籍のなかから幾つかの詩が取り上げられ<sup>2)</sup>、日本への紹介を兼ねた論考が一つ存在するに過ぎない。

更に、実際はこれまでに幾つもの〈詩画集〉をグラスは世に送り出しているにもかかわらず、それらに対する論考は極めて少ないのが実情である。グラスが長編作家として名を馳せたため、彼のロマン (Roman) に関心が集中する傾向にあること、また文学と絵画との芸術分野を横断していることも要因であろう。こうした背景からも、遺作となった〈詩画集〉の研究に対し、意義を見出すものである。

## 1. <遺作>としての刊行への経緯

この経緯に触れることは、決して無駄ではない。この作品全体の解釈や受容にも影響を及ぼすと考えられるからだ。

<遺作>となった作品に対して、われわれは、それが漠然とした感覚だとしても、無意識的でも、他作家の例から、あるいはいくつかのパターンを想定もしくはステレオタイプを持っているかもしれない。

作家の死後に時間をおいて出版された作品の場合、いわば<断片的>な作品を思い浮かべるかもしれない。あるいは中途までは作家自身が決定権を握っていたにせよ、作品完成の中途もしくは発表前に作家が亡くなったとすれば、出版社および編集者もしくは遺族が、遺稿を独自に編集して世に送り出す等のイメージを、われわれは真っ先に思い描くのではないか。無論、作家が急逝した場合には、残された草稿の中から、作家の意図を汲むか汲まぬかの決定も、遺族や出版社・編集者に委ねられる場合もあるだろう。また商業的な意味合いを重視し、いわば<売れる>要素を前面に押し出して、刊行への経緯をたどる例も想定し得る。

グラスのこの<遺作>について述べれば、グラスは急逝したにもかかわらず、生前、死去する直前までこの作品の制作に携わり、この世を去る前に既にすべて自身の手および自身の選択によって、一つの完結した作品、統一性を持った書籍として、完成させていたのだ<sup>3)</sup>。

これは実際、驚くに足る事実であり、そして作品と作家および芸術家としてのグラス理解の上でも、重要な要素であると筆者は捉えている。

ここでグラスの死の直前の詳細に触れる。グラスはリューゲン島(Rügen)<sup>4)</sup>での休暇を過ごしながらか、素描選びや、それを挿入する箇所、作品の順番、表紙の絵や表紙に用いる素材・装丁、本文に使用する紙質に至るまで、あらゆる事柄について、グラスの書籍の全ての著作権を持つシュタイデル社との相談の上、彼自身で決定し終えていたとのことだ。その帰路に体調を崩し、自宅のあるリューベック(Lübeck)へ戻り、入院してからわずか3日後に、グラスは肺炎でこの世を去った<sup>5)</sup>。まさしく最期まで<芸術家>として活動し続けた人生であり、そしてこの作品は、グラス自身が企画し、作者として成し得ることを完遂した上で残した、名実ともに<最後の作品>となった。

彼の妻ウーテ(Ute Grass)や、シュタイデル社のゲルハルト・シュタイ

デル (Gerhard Steidl)<sup>6)</sup>氏によれば、グラスは自身の死を予期していなかったと述べている<sup>7)</sup>。ただし、この〈遺作〉のなかで、グラスは自分の死期が近いことについて何度も触れており、それがこの作品全体を貫く一つの主題でもある。死は誰にでも平等に必ず訪れるものであり、自身の年齢やさまざまな衰えの自覚ゆえに、そのときがいつ来てもおかしくないという漠とした予感とともに生きる日々が、この作品のなかでは描かれている。おそらく、上記の発言は、悪化したその肺炎で、あっけなく死に至ってしまう自覚を、グラス本人は持っていなかったという意味であると推測される。しかしながらそれ故にこそ、まるで辞世の作とも取れる作品を残し、それを完成させてから死去したことに、グラスの芸術家としての、そしてこれまでの作品と一貫する姿勢を、筆者は認めるものである。

グラスは2015年4月13日に死去した。1927年10月16日生まれのため、享年87歳であった。この『限りあること』は2015年8月25日にシュタイデル社におけるプレス発表があり、同年8月28日に発売されるという経緯を経ている。

## 2. 遺作『限りあること』の特徴

書籍としての『限りあること』は、一般的に〈詩画集〉と呼ばれうるが、実際の内容は、詩の他、散文も含まれ、そしてグラスによる素描 (Zeichnungen) によって構成されている。

〈詩画集〉と言っておよそ想像されうるのは、例えば2012年に刊行された『蜂虻』 („Eintagsfliegen“)<sup>8)</sup>のような形式の、まさしく〈詩〉とグラスの手による水彩画で構成された作品形式であろう。

この遺作では、一口に〈詩〉と言っても抒情詩、散文詩、俳句を意識したと推察される短行詩があり、また散文も上述の散文詩の他、短いテキストから長いテキストまで混在している。それら各々がタイトルを持ち、独立した作品群による構成となっている。詩・散文においては96タイトル、そしておよそ65の〈鉛筆画〉<sup>9)</sup>によって構成される。〈詩画集〉とは表現されるものの、いかにもグラスらしく、いわゆるロマン級の一書籍として成立しているのが特徴的だ。

多面体のこの作品を分析する方法として、以下、書籍全体のタイ

トルともなった<詩>『限りあることについて』に焦点を絞って行こう。

### 3. 巻末詩：『限りあることについて』（„Vonne Endlichkeit“）

この書籍全体のタイトルでもあり、同題の<詩>は、巻末を締めくくる詩として収められている。綴りを一瞥して、方言を用いていることが明らかであり、これはグラスの作品中、これまでにない特徴である。

シュタイデル社のプレス発表では、グラスの意向に基づいて、「東プロイセン方言」（Ostpreußische Mundart）の詩から、この書籍全体を表すタイトルをその方言形式のまま冠したと説明されている<sup>10)</sup>。

グラス自身が、現在はポーランド領グダニスク（Gdańsk）、かつてのドイツ名でダンツィヒ（Danzig）の出身であり、そこで用いられていた言語、つまりグラスが少年時代までを過ごし、使用していた土地の方言を用いたと意図しての発表である<sup>11)</sup>。

プロイセン方言に特徴的なことは、とりわけ戦後、ドイツ領ではなくなった地域の東方移民の言語であり、世代的に話者が既に消えつつある言語でもあることだ。それ故にこそ、グラスはその言語による作品を残すことに意義を見出していたのだ<sup>12)</sup>。

当該の詩を分析するにあたり、まずは方言形式の原文の理解のために、高地（標準）ドイツ語（Hochdeutsch）へと翻訳する。その後、既に刊行されている英訳と共に、上述した、飯吉光夫氏による当該詩の邦訳を参照しつつ、筆者による日本語への翻訳を試みる。

#### 3-1. 方言形式による原詩と各翻訳

まず、以下に、当該の詩を原文より引用する。

VONNE ENDLICHKAIT

Nu war schon jewäsen.  
Nu hat sech jenuch jehabt.  
Nu is futsch un vorbai.  
Nu riehr sech nuscht nech.  
Nu will kain Furz nech.

Nu mecht kain Ärger mähr  
un baldich bässer  
un nuscht nech ibrich  
un ieberall Endlichkait sain. (VE: S.173)

現在においても、ドイツ語圏および日本や英・仏語圏における研究の中にも、筆者の知る限りでは、この詩の高地（標準）ドイツ語の翻訳は見られない。方言表現での作品は、方言でなければ表出不可能な要素を必ず含んでおり、そもそも標準語化すること自体がナンセンスな行為であると考ええる。しかし外国語の方言詩を理解するためには、その翻訳の過程を経なければ困難であることから、以下、筆者が試みる<sup>13)</sup>。

#### VON DER ENDLICHKEIT

Nun war schon gewesen.  
Nun hat sich genug gehabt.  
Nun ist weg und vorbei.  
Nun rührt sich nichts nicht.  
Nun will kein Furz nicht.  
Nun soll kein Ärger mehr  
und bald besser  
und nichts nicht übrig  
und überall Endlichkeit sein.<sup>14)</sup>

英語圏においては、既に同翻訳者における2種の英訳書が出版されている<sup>15)</sup>。既に触れたように、飯吉氏が雑誌に掲載した邦訳が存在するが、それは下記の通りである。

「これっきり」

これでもう終わり。  
これでもう十分。

これでもうお仕上げ，万事休す。  
これでもう何もそよそよと動かなくなる。  
これでもうおならも出なくなる。  
これでもうイライラもなくなって  
やがて調子もよくなって  
もう何も面倒なこともなくなって  
どこもかしこもこれっきりと願いたい。<sup>16)</sup>

飯吉氏は、表題の „Vonne Endlichkeit“ = „Von der Endlichkeit“ を、『これっきり』と訳しており、既に表記してきた筆者の『限りあることについて』とする訳とは、この時点で大きく異なっている。

翻訳の作業のなかでのことば選択には、必ずその翻訳者の解釈や、同詩人の他詩への、あるいは他者の詩への連想や、共起する作用への、いわば<間テキスト性>の受容の仕方が、如実に現れるものでもあると筆者は考える。

それはゲルマン語に属する英語への翻訳の際にも、必ず起こることだ。飯吉氏の日本語訳に次いで、以下、英語訳を引用する。

#### OF ALL THAT ENDS

All finished now.  
Had enough now.  
Done and dusted now.  
Nothing stirring now.  
Not even a fart now.  
No more trouble now,  
and all will soon be well  
and nothing remain  
and all be at an end.<sup>17)</sup>

英訳版のタイトルは、和訳すれば「終わりあるすべてに関して」となるのではないか。ends となっているのは名詞の複数形ではなく、動詞の 3

人称単数の変化形だからだ。that は先行詞が人や人以外でも用いられる関係代名詞と考えられる。all が先行詞であるため、特に that が用いられる例に相当することからも、上記のように判断可能だ。

英訳も、飯吉氏の訳とは大きく異なっている。

詩句においては、ドイツ語の nun が英訳では全て now に、そして und も and で統一され、文頭と末尾に置かれる言語上の特性の差異はあっても、同じリズムを刻んでいる。飯吉氏も nun の訳語は「これでもう」の訳語一つを文頭に置くことで訳語とリズムを統一している。

以下、この詩を、各翻訳を参照しつつ、行を追って分析していく<sup>18)</sup>。

### 3-2. 原詩と翻訳の分析と比較

詩句 1 行目は、ドイツ語では Nu war schon gewäsen. = Nun war schon gewesen. と主語が不明であるのに対し、英訳は all を主語としている。

尚、ドイツ語では動詞の定形、および詩句全体を通して再帰代名詞 sech = sich の表現等によって、主語として想定されるのは 3 人称単数である。

この 1 行目を含む、以下に続く 3 行目までのドイツ語は、時制がそれぞれ異なることが特徴だ。

ここで注意しなければならないのは nu = nun の捉え方である。nun は、「ある時点から見た同時」であり、現在への視点からの用法、また現在までの継続を示す用法、そして過去の結果としての現状をあらわす用法等、視点の置かれる「時点」によって意味合いが変化してくる。これは本来、英語の now にも言えることだ。nun を独辞典で引くと、その「時点」によって jetzt, unter diesen Umständen, inzwischen や mittlerweile, そして heute および heutzutage 等の意味に別れると例示されている。

1 行目の過去完了形は、その時制の形式自体が「現在は存在していない」ことを強調するものだ。この場合の nun は、表現者は <書いている現在> にいるが、ある特定の過去に完結、もしくはどうの昔に始まった事柄に対して視線を向け、その過去の結果としての現状を表現していると受け取れる。そのため nun は、inzwischen, mittlerweile の意味と捉えることができる。

2 行目は、現在完了形であるため、既に完了した出来事と現在との関連を意識する必要がある。上記の独辞典で挙げた単語の単体では、置き換える表現は困難であるとも考えられ、この nun に最も近い表現は、上記の単

語を使用するならば bis jetzt であり、または bisher の意味に当たると考えられる。

3 行目は現在形であり、nun の意味は、まさに jetzt に置き換え可能だ。

英訳を参照してみると、ドイツ語の時制は広く緩く、英語は細かく厳密であるという一般概念があるが、この詩では、ドイツ語は 1 行目、2 行目、3 行目と、時制がそれぞれ <過去完了形>、<現在完了形>、<現在形> と時制が異なることが明確であるのに対し、英訳ではドイツ語の時制に対応しているか否かは明確には判断できない。

#### ドイツ語 (Hochdeutsch)

1 行目：Nun war schon gewesen.

2 行目：Nun hat sich genug gehabt.

3 行目：Nun ist weg und vorbei.

(下線は時制を強調するため、筆者による)

#### 英語訳

All finished now.

Had enough now.

Done and dusted now.

英訳の 1 行目の finished は、過去形と受け取るのが素直な見方だが、完了形の助動詞を省略した形式で表現されている過去分詞と解することも可能ではないか。now はドイツ語の nun と同様に、書き手が過去に視点を置いて表現している場合、「そのとき、それから、そのときすでに」の意味を表すものとして過去時制とともに用いることもある。また現在における動作・状態の完了を表す用法として「(もう) ~してしまった」「(いま) ~したところだ」の意味を表すときに現在完了形と共起する。

英訳 2 行目も前行と同様に、had は過去形と見なすのが通例だと考えられるが、グラスの詩からの翻訳であることを考慮すると、過去分詞と双方の可能性があるだろう。

英訳 3 行目の done は do の過去分詞であるが、形容詞として「終わった、すんだ」とも解釈しうるし、動詞 dust の変化形の dusted は、過去形とも、また done と同様にも受け取ることができるだろう。形容詞として受け取れるとすれば、be 動詞が省略され、現在形によって表現されていると考えられることも可能だ。

飯吉氏の翻訳では、1 行目から 3 行目までは「これでもう終わり。/ これでもう十分。/ これでもうお仕上げ、万事休す。」である。1 行目・2



行目は英訳と類似しているが、3行目は独特の訳である。しかし、ドイツ語の *weg* と *vorbei* を、独英辞典で引くと、*weg* は *gone, away* に当たり、*vorbei* は *past, over, finished* に相当する。英訳者による *done* および *dusted* とは異なるが、むしろ独英の直訳を介せば、「お手上げ」「万事休す」の意味が、突飛なものではなく、字義に近いものであるとも理解できる。

ここまでを見てくると、英語の *now* はドイツ語の *nun* と言語的に近く、またそもそも *now* の古英語の形は *nu* であるため、その捉え方は書き手の視点がどこに設定されているのかによるところがあるのは同様だが、独英間では時制表現の相違点に疑問が残る。飯吉氏の訳は、文頭に揃った *nun* を意識し、工夫された表現であるが、独英と同様に、時制と *nun* の捉え方に疑問が残る。また、2行目の詩句は訳語では英日双方、*jenuch = genuch* の意味が強く打ち出されている印象を受けるが、*sich<sup>4</sup> haben* には「もったいぶる、騒ぎ立てる」などの意味がある。こうしたさまざまな疑問も湧いてくる。

4行目は、英訳も飯吉訳も同様の意味を表している。この4行目の訳出に際し、とりわけ飯吉氏はゲーテの『旅人の夜の歌』(„Wanderers Nachtlied. Ein Gleiches“)を意識して、訳出のことばも、日本語を読むのみであってもゲーテの詩への連想を呼ぶよう、巧みな選択をしている。

雑誌『すばる』で飯吉氏は、グラスのこの詩の後にゲーテの上述の詩を、有名であるがためか、タイトルを伏せたまま自身による邦訳で引き、双方の詩を日本語によって対比させている。以下に、その飯吉訳を引用する。続いて、ゲーテの詩句の原文を引用する。

あらゆる峰々の上に  
安らぎがある、  
あらゆる梢の中に  
お前は  
そよとの息吹も感じない、—  
鳥たちは森の中で沈黙している。  
待っていよ、やがて  
お前も憩うだろう。<sup>19)</sup>

„Wanderers Nachtlied“

Über allen Gipfeln  
Ist Ruh,  
In allen  
Wipfeln Spürest du  
Kaum einen Hauch;  
Die Vögelein schweigen im Walde.  
Warte nur, balde  
Ruhest du auch.<sup>20)</sup>

グラスの詩4行目に当たる飯吉訳の「これでもう何もそよそよと動かなくなる。」は、明らかに上記のゲーテの詩の「そよとの息吹も感じない」を意識させようよう「そよそよと」という表現を、ある意味、加えている。

グラスがゲーテの上記の詩を意識しているであろうことは、この詩行によってのみ知覚されるものではなく、言語の違いを越えて、まずゲーテのこの詩と詩の背景を知る者には自明のことだ。

尚、グラスの詩句4行目の Nu rieht sech nuscht nech. = Nun rührt sich nichts nicht. では nuscht = nichts と nech = nicht が並び、否定詞が二つ存在するように見える。この nuscht = nichts は主格として捉えうるものであり、「なんでもないこと、取るに足らないもの」の意味として名詞的に解することが可能だと考えられる。英語訳を参照してみた上でも二重否定ではないと言える。

5行目のグラスによる原文 Nu will kain Furz nech. だが、低地ドイツ語全般として、冠詞は格変化がほぼみられない特徴がある。それゆえ、Furz は男性名詞であるが、1格のほか4格でも表記は同様となる。高地（標準）ドイツ語への翻訳に際して、Nun will kein Furz nicht. としたのは Furz を主格と解したからである。上行までの詩句の主語が多く不明であるが、動詞の定形等から、主語は3人称単数であると推定されることに対して、同じ定形で表されるにしても、ここで ich または man が主語として現れてくると解釈するには無理があると考えられるからだ。

また4行目の詩句の sech riehren = sich rühren から、動きのあるものと

して、5行目で Furz「おなら」をグラスは取り上げている。同じ人間から発せられるものとしても、風や空気の流れを連想させるものにせよ、ゲーテの Hauch「息吹」、つまり口から発せられるものに対して、グラスは下から発せられるものを挙げており、極めてグラスらしいことば選択である。しかし単にゲーテを意識して、グラスはより彼らしい野卑な語を選択したのみならず、ゲーテの詩句の4行目、5行目が意味的関連を持つことにも意識が向いていると考えられる。

音韻的に riehren = rühren が spüren を連想させ、否定詞がここで初めて現れる点など、ゲーテの詩と符号する特徴がまず認められる。ゲーテはここで du「お前」という主語を立てているが、グラスは一貫して人物と受け取れる主語を立てていない。そして当該の2詩行ともピリオド(Punkt)で区切っている。

ゲーテの詩を意識する、とは間テクスト的に連想を呼ぶ部分と、その上でグラス独自の表現との差異との双方が現れてくるものだ。

グラス4行目の詩句では、主格として受け取れるのは nuscht = nichts であり、「もはや何一つとるに足らぬものさえ動かない」状態なのだ。続くグラス詩句5行目の wollen は事物を主語とし、否定をあらわすことばとともに用いることで「なかなか～しようとしな、～しそうにない」の意味を表す。Furz もいわば動きのあるものだ。そして「屁のようなこと＝とるに足らないもの」という意味も持ち合わせている。4行目の sech riehren = sich rühren が5行目にもかかっていると考えれば、「もはやおならすら出そうにない」と、Furz を主格として、上行の意味を更に強める意味で解釈できる。

飯吉訳では「これでもうおならも出なくなる。」である。

英訳版を見ても、4行目と5行目は関連性を持つ文章となっている。Nothing stirring now. / Not even a fart now. の英訳5行目にあたる even は、前出の語句の言い換えを強調して「むしろ～ですらある、それどころか」の意味を表す。「いまや何も動かない。/それどころかいまやおならでさえも。」と和訳できるだろう。

英訳の even は4行目と5行目の意味的関連性を示す明らかなるシグナルであり、英訳もまた、ゲーテの詩を意識していると推察可能かもしれない。だからこそ、英訳1行目に、ゲーテの詩句1行目を意識して、all を

主語として立てたのではないかとも考えられる。

尚、英訳版 4 行目の stirring は、この語を形容詞として受け取り、現在形と理解することも可能だが、同様に be 動詞が省略されたとして、動詞 stir の現在進行形と受け取ることも可能だろう。その場合には「今や何も動いていない」と和訳できる。

さて、6 行目から最終行までを見ていこう。

6 行目は上行までと nu = nun で始まる形式は同様だが、Nu mecht kain Ärger mähr = Nun soll kein Ärger mehr はピリオドなく、最終行の 9 行目までの詩句と一つのまとまりとなっている。

6 行目の kain Ärger もその上行の Furz と同様に、男性名詞だが、方言形式では冠詞の語尾変化で格が明示されない。やはりグラス自身を思わせるような人物を主語ととるならば、Ärger は目的格と解することができるが、5 行目と同様の理由により、Ärger は主格と解釈するのが自然だと考えられる。

sollen は話し手の意志や願望を表すため、書き手の意志や願望はここに現れている。上行の 4 行目、5 行目の詩句のように、物理的に何一つ動くものもなく、生理現象も起こらない世界では、感情もまた同様に揺り動かされることもなくなるだろう。それは静かな世界であり、この〈書き手〉はそれを望んでいるらしい。6 行目を単独で和訳すれば、「もはやこれで腹の立つこともなくなってもらいたい」と解することができるだろう。

7 行目以降は、nu = nun に代わり un = und が文頭に立ち、変化ももたらしつつ、字義通りその境目を繋いでいる。しかし、繋がりがあるとしても、とりわけ 7 行目のグラスの詩句は、ことば少なで理解が困難である。

ここで英訳を参照してみよう。

#### ドイツ語 (Hochdeutsch)

#### 英語訳

6 行目 : Nun soll kein Ärger mehr

No more trouble now,

7 行目 : und bald besser

and all will soon be well

8 行目 : und nichts nicht übrig

and nothing remain

9 行目 : und überall Endlichkeit sein.

and all be at an end.

英訳版は、むしろ明らかに文体も変えている。no で始まる詩行までは、元のドイツ語はどの詩行も動詞を欠いていないが、英訳版では必要最小限の動詞による訳出であり、be 動詞または完了の助動詞が入ると推測ないしは可能性のある箇所が省略された表現と捉えることができる。しかし and で始まる詩行からは、ドイツ語とは裏腹に、欠けるものがない説明的な文となっている。

英語版の 7 行目および 9 行目の詩句では、再び all を主語として立てている。and で 6 行目と結ばれていても、主語が異なるので、ドイツ語にはないコンマが 6 行目の末尾におかれている。そして 7 行目からは助動詞 will が用いられている。本動詞が原形であることから 8 行目、9 行目にも will がかかっているのは明らかだ。英訳版の解釈では「もはや面倒ごとはいくさん、/そしてすべてがきつとすぐに良くなり/そして何も残らず/すべてが終わりとなるだろう。」となるであろうか。英語 will は意志未来、単純未来、推量・可能性の意味を表し、主語や他の文成分によっても表出する意味が異なる点でドイツ語の wollen と用法が類似している。ドイツ語では<書き手の意志>が表出されているとしても、英訳版は、ここでは主格が all と nothing であり、意志未来で解釈するのは無理がある。3 人称単数扱いの主語では単純未来も推量も、和訳すれば「～だろう」となるが、will は must に次いで話者の高い確信度を表すため、推量・可能性における確信の<強さ>の表出に置き換えて訳出していると捉えられる。

飯吉訳を参照すると、7 行目は「調子も」よくなる、と英訳版の all とはまた異なる形で、心身の調子を加味して訳している。このグラスの詩行の un baldich besser = und bald besser の表現も、ゲーテの『旅人の夜の歌』の 7 行目の Warte nur, balde 「待っていろ、やがて」の balde に呼応して、飯吉氏は「やがて調子も良くなって」（傍点は筆者による）と訳語を選んでいると思われる。

8 行目は、原文の主格は再び nuscht = nichts であり、4 行目と同様に、nech = nicht と並んでいる。字義通りならば「とるに足らぬものも残らず」と解釈できる。ここを飯吉訳では「もう何も面倒なこともなく」と訳している。6 行目の Ärger を「イライラ」と訳しているが、8 行目の訳の「面倒なこと」は、意図的なものか、上行の Ärger と被る印象を持つ。「とるに足らないこと」まで「残らない」から、6 行目を意識した上で 8 行目を「面

倒なこともなくなる」としたのだろうか。

9行目で「どこもかしこもこれっきりと願いたい。」と「願いたい」に<書き手の願望>が表現されている。これは上行の「これでもうイライラもなくなって/やがて調子もよくなって/もう何も面倒なこともなくなって」にもかかるものだ。しかし、un ieberall Endlichkait sein. = und überall Endlichkeit sein. のとりわけ Endlichkeit を含んで「これっきり」と表現するのは、飯吉氏のどのような解釈からなのだろうか。

グラスの詩とゲーテの詩を引き比べたのちに、飯吉氏は以下のように述べている。

「この<憩う>は死ぬことを意味しているだろう。ゲーテは山上での思いを宇宙空間的な規模にまで押し広げて、その中での自分の来るべき死をおもっている。それに比べてグラスは自分が死ぬことなんか考えていない。身近にいろいろ面倒があつて、このような人生にはもうこりごりだ、早いとこ死んでしまってもいいという考えが先ずあるが、それでもこの状態を早く良くして、元どおりの平穩無事な生活に戻りたいという願いもこの詩には込めている。」<sup>21)</sup>

この書籍全体のなかで、随所に、人生の終わりが近づいていること、歯や肺が弱って来ている様子、精神的にも調子が良くない様子、故郷や大事な人たちや自身のエネルギーやさまざまなものに対する喪失、そしてさまざまな終わりが描かれている。それぞれ独立した作品のタイトルだけを見ても、ende や letzt, Angst や Verlust という言葉が多く見られる。散文の中には、妻と自分の棺を特注して作り、また墓地も見つけに行き、場所も墓石も決める様子が描かれているものもある。

しかし同時に、Hoffnung や frei, また jetzt や alltäglich という言葉も多く見られる。そして例えば、„Fremdenfeindlich“ といったタイトルの詩もあり、現代の移民問題に通じる社会風刺など、依然として時事問題に対してラディカルな側面は健在であったことも見受けられる。

この書籍のプレス発表では、「喪失 (Verlust) や老年期 (Altern) や有限性 (Endlichkeit) が重要なテーマとなっている」<sup>22)</sup> とシュタイデル社は公式見解を述べている。作品全体を貫く主題として描かれている事柄を具体的

に示せば、少年時代、故郷、母親などグラスが懐かしさを覚えるものについて、そして先述のような体の衰えと、同時に、老齢に至って得た自由について、自身の人生に終わりが近づいていることへの自覚とそれへの処し方である。それらを読んで気づくのは、そう遠くないある時に自分の人生が終わる自覚を持ちつつ、それがいつくるのか不確かな狭間にいる<今、現在>へのグラスのまなごしの強さである。自身のさまざまな力の喪失の実感と、反対に<まだやれる>という意気込みを持つ瞬間との双方にいる様子が、全体として見て取れる。

それらの文脈のなかで捉えると、飯吉氏の「これっきり」という訳について、次のように推察できる。飯吉氏の説明の文章も加味すると、「早く死んでしまいたい」といった気持ちと、「元気になって、また元どおりになって、平穩無事な生活を送りたい」という気持ちの、双方の「これっきり」という意味を含んで訳語を選んでいるのではないだろうか。

ただし、雑誌『すばる』では、グラスにしてもゲーテにしても、ドイツ語の原文は一切引かれず、日本語のみによって記述されている特徴は見逃せない。雑誌の特性上、読み手として想定される対象が幅広く、日本語のみで読み理解する層が多く含まれているからこそ、明らかにゲーテの詩句の訳と重なるようにも訳語を意識して選択していると考えられる。

先行する飯吉氏の訳と、英語訳とともにグラスの詩を見てきたが、それらの考察を踏まえた上で、筆者の試訳を試みる。

#### 4. 試訳と解釈

以下、筆者による試訳と解釈を記す。

『限りあることについて』

もういつの間にかとうに過ぎ去ってしまっていた。

もう十分いままでいろいろあった。

もういまや綺麗さっぱり消えて無くなる。

もうウンでもスンでもない。

もうおならも出そうにない。

もうごたごたはごめん

やがてもっと良くなって  
つまらぬことは残らず  
どこにでも限りがあってもらいたい。

グラスの詩は、人生の終わりを意識して描いた詩であるにもかかわらず、遊びに満ちている。まず原詩の nu から始まる詩句の連続に続く un は、nu の逆さ表現である。そして、原詩の 1 行目は war … gewesen = gewesen という過去完了形によって、2 行目は hat … gehabt = gehabt という現在完了形によって、それぞれ sein と haben を変奏して繰り返す表現を、意図して行なっているだろう。nuscht nech = nichts nicht をこの短い詩のなかで 2 回並べて表記するのも、一見、否定詞が並んでいるかのようで、場合によっては読み手をまごつかせる。左記の nuscht nech も含むが、同じ音を語頭に持つ語を近くに表記する特徴も、おそらく遊び心からだろう。: jenug gehabt, futsch un vorbei, baldich besser, 行をまたぐが ibrich un ieberall に見られるように。また、上述した Furz のことば選びについても然りだ。

ゲーテの『旅人の夜の歌』を思わせるような訳語選択を、筆者は行っていない。それはすでに飯吉氏の訳が果たしていると考える。そしてまた Furz を選ぶ姿勢に如実に表れているように、グラスはグラスらしく、上記のように、遊び心や、場合によっては神経に触るようなユーモアと皮肉を混ぜ、高尚ではなく、しかし彼の特徴を守りながら、静かな時が来ることを描いていると考えるからだ。

## おわりに

<遺作>としての書籍のタイトルともなった、巻末に収録された詩に焦点を絞って見てきたが、ここで関連する他の作品に目を向ける必要がある。

同書の巻頭詩は „Vogelfrei sein“(VE: S. 7) というタイトルの散文詩である。Vogel という言葉がタイトルからして冠してあり、ここからも、既出のゲーテの詩を連想する側面もあるだろう。

尚、この vogelfrei の意味は「法の恩典・保護を奪われた」である。しかし同時に字義通り、「鳥のように自由に」という意味でもグラスは用いていると筆者は考える。そのためタイトルとして日本語に訳すには二つの意味合いを表す訳語選びは非常に難しい。



間テクスト的側面に戻るが、先ず、グラスの読者であれば、巻頭詩のタイトルから想起するのは、グラスの最初に刊行された詩集『風見鶏の取柄』 („Die Vorzüge der Windhühner“ : 1956年)<sup>23)</sup>であろう。この〈処女作〉は、〈遺作〉とは逆に、作品名と同名の詩が、巻頭 (VW: S. 3) を飾っている。2番目に収録されている詩は『鳥の飛翔』 („Vogelflug“ : VW: S. 5) であり、この〈処女作〉の詩集自体がそもそも〈詩画集〉である。〈遺作〉と同様、色のない黒で描かれた素描画、とりわけ鳥の絵が添えられている点も類似している。

話を〈遺作〉の巻頭詩に戻す。この散文詩の2連目の出だしに次のような詩句がある。

「自身で感じている。羽のように軽く、法の保護を奪われた存在であることを。もう長いこと撃ち落とされるに機は熟しているのだが。」

Mich spüren. Federleicht vogelfrei sein, wenngleich seit langem reif zum Abschluß. (VE: S.7)

ここにゲーテの『旅人の夜の歌』と同じ spüren が用いられている。しかもゲーテの Spürest du の表現に対して、Mich spüren. だ。巻末詩のみならず、こうした書籍全体から間テクスト的に、確かにゲーテへの意識は読み取れるだろう。

詩句自体に注目すると、もう死期がいつ来てもおかしくないグラスが自覚を持っていることが、巻頭詩から既に描かれている。しかし上述のこの詩のタイトルの vogelfrei についての記載を参照されたい。訳出に際してはドイツ語の意味として通常用いられる意味で表現した。この vogelfrei は、その意味からすると、もうすぐ消えゆく身として、先の保証はないことの表現、あるいは力の衰えからか、鳥の群れから外れてしまったのかと想像を呼ぶような、より若くより精力的に活動した時代に比して現役では次第になくなっていく状態・心理の表現と解釈できる。しかし一方で語の個々の意味の通りに「鳥のように自由な存在である」という意味も同時に込められていると筆者は解釈する。この巻頭詩から始まる一冊の書籍の世界は、グラスのさまざまな表現方法がぎっしりと詰まった実験的空間でもある。その事実から、後者の意味も強いものであると考えるからだ。ある

ものを失うが、同時に手放すことによって得る自由、老齢に至って初めて得ることのできた自由、長さをあらかじめ測りあるいは明確に知りうることはできないが、残された時間を大切に丁寧に生きる喜び、その時間の濃密さも書籍全体から読者に伝わる。グラスはむしろ「終わりがあること」「限りがあること」を喜んで受け入れているようにすら思われる。その「自由」はそこはかたなく寂しさも感じさせるが、グラスらしい方法で、その「自由」を享受し、過ごしたのだろう。その結集の一つがこの〈遺作〉である。

人並み以上の活動をなし得ても、それでもどこまで行ってもこれでいいという線は存在しないのかもしれない。グラスは死の直前に、自身の死を悟っていなかったというが、こうして自身の詩人・作家としての始まりを意識し、〈遺作〉となった詩画集によって、その〈処女作〉を連想させる詩および素描を構成することによって、作家・芸術家としての人生と作品を、円環として自ら閉じてもいるのだと言えるだろう。

2012年のイスラエル批判の詩を発表後、グラスは「もうロマンは書かない」と発言した。それは、彼が長編作家としてあまりに有名であるために、一種の断筆宣言として受け取られる側面もあった。しかし、グラスは、小説を書くことと並行して、絵画、版画、彫刻、そして音楽に至るまで、さまざまな芸術活動を続けてきた長い歴史があり、それは彼にとっては作家としての活動と分け隔てのあるものではなかった。グラスはグラス独自のさまざまな表現方法を持っていたのであり、その表現の幅を以って、年齢と折り合いをつけながら、グラスにしかできない方法で、ロマンに変わる作品を残し得たのである。

この〈遺作〉となった〈詩画集〉は、抒情詩、散文詩、短詩、短文および長文による散文と素描を通して、全体として、コラージュのような構成によって、グラスの人生をロマンのように描き出している作品だと言えるだろう。

## 注

- 1) 作品からの引用は Grass, Günter: VONNE ENDLICHKAIT. 1. Aufl. Göttingen (Steidl Verlag) 2015 に拠る。以下、同書からの引用は書名を VE とし、本文中に書名の略称と頁数のみを記す。本文中で書名に言及する際には、以下、『限りあること』とする。書籍名と、同題の巻末詩との判別のため、〈詩〉

- に対する言及の際には『限りあることについて』とする。
- 2) 飯吉光夫：日常詩人ギュンター・グラス：遺作詩画集『これっさり』を巡って すばる (集英社) 38(10), 2016-10. 154-167 頁。
  - 3) epd/nd: Letztes Buch von Grass. Endlich. Neues Deutschland, Nr. 194, Rubrik: Feuilleton, Freitag, 21. August 2015, S. 15.  
epd: Literatur. Letztes Grass-Buch Ende August. Stuttgarter Zeitung, Nr. 192, Rubrik: Kultur, Freitag, 21. August 2015, S. 26.  
epd: POSTUME VERÖFFENTLICHUNG. Grass' wirklich allerletzte Tinte. die tageszeitung, Nr. 10800, Rubrik: Nord, Mittwoch, 26. August 2015, S. 26.  
epd/nd: Günter . Letztes Buch von Grassrgestellt. Neues Deutschland, Nr. 198, Rubrik: Feuilleton, Mittwoch, 26. August 2015, S. 14.  
Verlag stellt Grass-Buch vor. Vorarlberger Nachrichten, Nr. 196, Rubrik: Kultur, Mittwoch, 26. August 2015, S. D8.  
Weiderman, Volker: Literatur. Federn im Wind. Der Spiegel, Nr. 36, Rubrik: Kultur, Samstag, 29. August 2015, S. 117.  
Schütt, Hans-Dieter: Das literarische Vermächtnis von Günter Grass: »Vonne Endlichkeit«. Federleicht vogelfrei. Neues Deutschland, Nr. 202, Rubrik: Feuilleton, Montag, 31. August 2015, S.15.  
Radisch, Iris: Begräbnispläne. „Vonne Endlichkeit“ - in seinem letzten Buch nimmt Günter Grass Abschied vom Leben. ZEIT (Literatur), Nr. 41, Rubrik: Belletristik, Donnerstag, 8. Oktober 2015, S. 22-23. 等, 各紙が報じている。尚, 記事の記載順は日付および紙名のアルファベット順による。
  - 4) メクレンブルク-フォアポンメルン州にあるドイツ最大の島で保養地として有名。
  - 5) Weiderman, Volker: a. a. O. 左記の記事が上記注 3) に挙げた書評のなかでは最も詳しく報道している。ただし, 書籍に関する細部までグラス自身が決定していた事実の詳細に関しては, リューベック (Lübeck) にある ギュンター・グラス・ハウス (Günter Grass-Haus) のスタッフから, 筆者が 2017 年 9 月 2 日に訪れた際に直接, 取材したものである。
  - 6) シュタイデル氏についてはドキュメンタリー映画が作成されており, それに詳しい。日本においても 2013 年 9 月に放映された。日本においては, カラー写真やインタビュー等が共に収められている字幕付き DVD ブックが存在す

る。字幕付きの映像のみ(2013年)については、インターネット上の配信サービスによって鑑賞が可能である。

ゲレオン・ヴェツェル(Gereon Wetzel)・ヨルク・アドルフ(Jörg Adolph)(監督)(2015年)『世界一美しい本を作る男～シュタイデルとの旅』[DVDブック]、(映画原題:How to Make a Book with Steidl)、東京:『考える人』編集部/テレビマンユニオン編。以下、DVDブックからの引用にはページ数のみを記載する。

筆者が現地を訪れた経験からも、出版社としてのシュタイデル社はゲッティンゲン(Göttingen)の細い路地沿いにある、極めて小さく地味な社屋で、気づかず通り過ぎてしまいかねないほどの規模である。しかし、グラスの他、「アメリカを代表する写真家、ロバート・フランク、シャネルのカリスマデザイナー、カール・ラガーフェルド……天才たちに愛されてきた出版社」(5頁)であり、「さまざまな分野のトップクリエイターをクライアントに抱え、数年先まで出版プロジェクトが控えている。今や世界で最も活躍する出版社でくこの10年で最も重要な出版社」とも言われる」(38頁)。作家のみならず絵画も彫刻等も手がける多面体の芸術家であるグラスにとって、出版社もまた大きな役割を果たしていると言えるだろう。

- 7) 筆者の上記の取材による。尚、飯吉光夫:追悼ギュンター・グラス;ギュンター・グラスの死 すばる(集英社)37(6),2015-09,184頁。にも個人的な経路で同様の話を飯吉氏が聞き知ったことが記されている。
- 8) Vgl. Grass, Günter: Eintagsfliegen. Gelegentliche Gedichte. 1. Aufl. Göttingen (Steidl Verlag) 2012.
- 9) <表紙>を飾る素描画を含め、65種となる。
- 10) dpa; SN: KURZ GEMELDET. Letztes Grass-Buch wird veröffentlicht. Salzburger Nachrichten, Nr. 196, Rubrik: Kultur, Mittwoch, 26. August 2015, S. 7.  
epd: Stuttgarter Zeitung: a. a. O..  
Verlag stellt Grass-Buch vor. Vorarlberger Nachrichten: a. a. O..
- 11) プレス発表後の各紙も、シュタイデル社の表現通りに「東プロイセン方言」と記載しているが、しかし、これには多少の異論がある。当時のダンツイヒは西プロイセン方言の地域下にあたる。確かに、限りなく当時のケーニヒスベルク(Königsberg; 現ロシア連邦領カリニングラード Калининград, アルファバート表記 Kaliningrad)に近く、東プロイセンと西プロイセンを分

けるのは、ヴィスワ川 (Wisła: 現ポーランド語名, ドイツ語名 Weichsel) であり, 現ポーランド国内を流れてグラスの故郷であるグダニスクでバルト海へと注ぐ位置にある。川を隔てて隣り合った地域であり, 各々の地域性が混在する土地であり, 方言としても極めて親和性が高いことはやはり間違いないが, 上記を指摘しておく。

プロイセン方言全体も, いわゆる低地ドイツ語 (Plattdeutsch もしくは Plattdüütsch) と総括して呼ばれる方言の一種として数えられる。方言とは, 日本の状況を見ても明らかなように, 地方によって大きく異なる語彙・表現を持つのは確実であるが, 地域全体としての共通項もまた見られる。それ故, 個々に特徴的な言語側面を持っていたとしても, 逆に低地ドイツ語全体から捉えると, プロイセン方言のなかでの差異を超えて, 低地ドイツ語としての共通項も存在することも付言しておく。例えば, プロイセン方言の辞書を引いて見つからない語彙が, 下記に挙げる低地ドイツ語のさまざまな地域方言辞書から見つかることもしばしばあった。

尚, グラスは, 母方から少数民族のカシューブ人 (ドイツ語表記: Kaschube, カシューブ語表記: Kaszëbi) の血を引いており, カシューブ語 (ドイツ語表記: Kashubisch, カシューブ語表記: Kaszëbsczi jãzëk) も解する。そのため, リューベックのギュンター・グラス・ハウスのスタッフの方々に筆者が質問した際にも東プロイセン方言のみならず, カシューブ語の影響もあるとの指摘があった。

また, 以下のツァイトの書評においては「彼が子どもの頃に使用していたカシューブ方言で (in der kaschubischen Mundart seiner Kindheit)」と表現されている。Radisch, Iris: a.a.O..

- 12) 巻末から二番目に『クルブユーン氏の問い』 („Herrn Kurbjuhns Frage“ VE. S. 172) と題された短い散文に次のような一節がある。表題のクルブユーン氏も東方移民であり, 同じ方言を話す人物として, 方言で語り手の「わたし」(ich) に問いを投げかける場面が描かれている。「故郷を追われた人々と彼らは呼ばれる。彼らとともに, わたしを幼い頃から温めてくれた言語が死んだ。その名残をわたしは救いたかったが, 無駄だった。」  
上記にある通り, グラスは「その名残」として, 最後に自身を「幼い頃から温めてくれた言語」のみによって詩作し, 巻末を締めくくったのだと考えられる。

- 13) 方言形式から高地（標準）ドイツ語への翻訳に際しては、以下を参照した。  
低地ドイツ語を含む<文法的特徴>については下記を主に参照した。  
渡辺格司：低ドイツ語入門＝ Einführung in't plattdüütsch 大学書林 1958。  
河崎靖：ゲルマン語学への招待 ヨーロッパ言語文化史入門 現代書館  
2006。  
清水誠：ゲルマン語入門 三省堂 2012。  
Arbatzat, Hartmut: Platt - dat Lehrbook: Ein Sprachkurs für Erwachsene. Hrg. von  
Institut für niederdeutsche Sprache, Hamburg (Quickborn-Verlag) 2016。  
<辞典・辞書>としては主に下記を使用した（この他、スラヴ語、バルト語、  
北欧諸語の辞典・辞書および書籍を相互に参照する必要があった。少な  
からずそれらによって法則性や語彙への理解への一助となったが、訳出に際  
して不可欠であったもののみを記載する）。  
Frischbier, Hermann: Preußisches Wörterbuch. Ost- und westpreußische  
Provinzialismen in alphabetischer Folge. Gebundene Ausgabe. Olms (Hildesheim)  
1971。  
Becker, Rudolf K.: Kleines ostpreußisches Wörterbuch: So schabberten wir to Hus  
(Ostpreußisches Mosaik) Gebundene Ausgabe. 1. Aufl. Würzburg (Rautenberg)  
2003。  
Wittkowski, Ulrich: So plachanderten wir in Königsberg und Ostpreußen. 2. Aufl.  
Husum (Husum Druck- und Verlagsgesellschaft) 2015。  
Thies, Heinrich / Kahl, Heinrich: Der neue Sass. Plattdeutsches Wörterbuch:  
Plattdeutsch-Hochdeutsch. Hochdeutsch-Plattdeutsch. Plattdeutsche  
Rechtschreibung. Hrg. von Fehls-Gilde Gesellschaft für niederdeutsche  
Sprachpflege, Literatur und Sprachpolitik e. V. 8. erweiterte Aufl., Kiel/Hamburg  
(Wachholtz Verlag) 2016。  
Lindow, Wolfgang: Plattdeutsches Wörternuch. Hrg. vom Institut für Niederdeutsche  
Sprache. Bremen (Verlag Schuster Leer) 1984。  
Herman-Winter, Renate: Kleines plattdeutsches Wörterbuch. für den  
mecklenburgisches-vorpommerschen Sprachraum. Neumünster (Wachholz Verlag)  
1986。  
Bockmann, Hartmut: Ostpreußen und Westpreußen. 3. Aufl. Berlin (Siedler) 1995。  
尚、訳出後、リユーベックのギユンター・グラス・ハウスにおいて2017年

9月1日から9月3日までの滞在中、どんな質問にも喜んで長時間にわたって複数のスタッフの方がお付き合いくださったことに、この場を借りて、改めて深く感謝いたします。

また、保坂一夫先生をはじめ、日本大学文理学部の Erich Meuthen 氏、Stefan Jäger 氏にも、貴重なご指摘や質問への回答をいただいたことにも感謝の意を表します。

- 14) 高地（標準）ドイツ語訳といっても、いわば逐語訳である。本論中に記したように方言詩の完全なる標準語化はナンセンスであるのみならず、本来は、多くの言葉を補わなければ標準的な意味を持つ文章にはなりえないだろう。ギュンター・グラス・ハウスのスタッフの方々にも、また上述の日本大学文理学部のドイツ人の先生方にも、ドイツ人として理解は可能だが、ドイツ人でも全き標準語にすることは困難であり、また作家が個々に持つ言語表現の特徴としても、グラスの言語表現は独自の特徴が強いため、それらを含めば尚更、困難であるとの意見は一致している。
- 15) Grass, Günter, OF ALL THAT ENDS: translated by Breon Mitchell, 1. publ. London (Harvill Secker) 2016.  
Grass, Günter, Of All That Ends: Gebundene Ausgabe. translated by Breon Mitchell, 1. U. S. Edit. Boston / New York (Houghton Mifflin Harcourt) 2016.
- 16) 飯吉：前掲書 . 154-155 頁。
- 17) Grass, Günter, OF ALL THAT ENDS: translated by Breon Mitchell, 1. publ. London. a. a. O.. S. 167.
- 18) 以下の各言語による詩句の分析に際しては、注 13) に記載のもののほか、下記を相互に参照した。

独⇄日辞典：

国松孝二（他）編：独和大辞典 第2版 小学館 2000

濱川 祥枝（他）編：CASIO EX-Word クラウン独和辞典 第4版 三省堂 2009

根本道也（他）編：アポロン独和辞典 第3版 同学社 2010

在間進（他）編：アクセス独和辞典 第3版 三修社 2010

岩崎英二郎（編）：ドイツ語副詞辞典 白水社 1998

独独辞典：

Dudenredaktion (Hrsg.): CASIO EX-Word Deutsches Universalwörterbuch. 6. Aufl.

2007

Dudenredaktion (Hrsg.): Das Bedeutungswörterbuch. Duden Bd.10. 4. Aufl. Berlin

2010

独⇄英辞典：

Oxford University Press (ed.): CASIO EX-Word Oxford German Dictionary. 3. edit.  
German-English. 2008

Oxford University Press (ed.): CASIO ER-Word Oxford German Dictionary. 3. edit.  
English-German. 2008

Collins in Zusammenarbeit mit der Langenscheidt-Redaktion (Hrsg.): Langenscheidt  
Collins Großwörterbuch Englisch: Englisch-Deutsch/Deutsch-Englisch 2008

英⇄日辞典：

小西友七（他）編：ジーニアス英和大辞典 大修館書店 2001

井上永行（他）編：ウィズダム英和辞典 第3版 三省堂 2012

英英辞典：

オックスフォード大学出版局（編）：オックスフォード現代英英辞典 第9  
版 旺文社 2015

- 19) 飯吉：前掲書. 155 頁。
- 20) Goethe, Johann Wolfgang von: Wanderers Nachtlied. Ein Gleiches. In: Goethe's  
Werke. vollständige Ausgabe letzter Hand. 1. Band. Unter des durchlauchtigsten  
deutschen Bundes schützen den Privilegien. Stuttgart und Tübingen (Cotta) 1827, S.  
99.
- 21) 飯吉：前掲書. 155 頁。
- 22) epd: Stuttgarter Zeitung: a. a. O..  
epd/nd: Neues Deutschland.21. August 2015 a. a. O..  
epd/nd: Neues Deutschland.26. August 2015 a. a. O..
- 23) Grass, Günter: Die Vorzüge der Windhüner. Gedichte und Zeichnungen.  
unveränderter reprographischer Nachdruck der Erstaufgabe von 1956 in München  
(Luchterhand Literaturverlag) . Göttingen (Steidl Verlag) 2001. auf Blatt I . 以下、  
同書からの引用は書名を VW とし、本文中に書名の略称と頁数のみを記す。  
尚、飯吉氏は、グラスの詩の翻訳を数多く手がけており、他の作家・詩人  
にも造形が深く、この〈処女作〉である詩集の訳者でもある。